

## 結成 50 周年を祝して

## 巻頭言 旭交会結成 50 周年に思うこと

会 長 佐々木 孝 雄 (平成31年)

今年度、「旭交会」は結成 50 周年という記念すべき年度を迎えております。このように長い間、本会が継続・発展できていることに、会員皆で心より祝い、喜び合いたいと思います。

今年度 4 月の総会においては本会結成 50 周年を記念して、大きく三つの事業等の実施が承認されました。一つは、9 月に行われる現職校長会との合同研修会「教育を語る会」における講演会を「50 周年記念講演」と位置付けて実施するということです。講師にマジシャン・タレントのブラボー中谷氏をお招きし、50 周年の記念にふさわしい盛会にしたいと考えています。現職校長との情報交換や親睦を深めることができる絶好の機会ともなっておりますので奮ってご参加ください。もう一つは、今回の会報第 13 号ですが、例年より内容を充実させ、ページ数等も増やして、「50 周年記念号」として発行するということです。県の退職校長会会長様や横手市の教育長様からのご祝辞も賜り、掲載させていただくなど記念の年にふさわしい会報にしたいと思っております。さらにもう一つは、「会則の改正」であります。会則は策定されてから長年が経過しており、この機会に全面的に見直しすることとしました。総会で承認されましたので現在既にその会則の下で会務等が行われております。以上、改めて記念事業等を紹介させていただきました。

最後になりますが、本会の今後を見据えて、会員の皆様にお願ひがあります。現在本会では、各地区の担当者により各会員宅に直接資料等を配布していますが、実は担当者の高齢化等が進んで、年々配布が難しい状況になってきています。若手会員に交代しようにも新規加入者数が少ない状況等もあり、交代者が簡単には見つからなくなってきました。併せて、事務局員等の役員の選出にも苦慮しつつあります。本会が今後も継続・発展していくためには、男女問わず、誰もが一度は役員等の役割を担うという、「協力・協働体制」が必要になってきている現状と言えます。特に、退職 10 年以内の会員の皆様には一度は何かしらの役割を担って欲しいと考えています。皆様のご協力に期待しております。

## 50年に寄せて、思うこと

横手市教育委員会教育長 伊 藤 孝 俊 (平成26年)

横手市退職校長会が、発足以来 50 年の歴史を紡いでこられたことに衷心より敬意と祝意を表します。また、平成 25 年より会報「旭交」を発行され、会員相互の交流の礎を築かれてこられたことにも、頭の下がる思いでいっぱいです。半世紀にもわたる本会の活動は、教育現場にとりましては、誠に心強い応援団でありました。紙面をお借りしまして、改めて感謝申し上げます。

時は移り、少子化が止まりません。横手市は市町村合併時より、いち早く統合計画を策定し、順次統合を進めて参りました。その結果、小学校は 14 校、中学校は 6 校となりました。このうち児童生徒数が、400 名以上の学校は、小で 3 校、中で 1 校、300 人台は小で 1 校、中で 2 校、200 人台は小で 3 校、中で 2 校、100 人台は小で 4 校、中は 0、100 人以下は小で 3 校、中で 1 校となっています。統合計画策定時の発想では、統合すべき学校が 8 校はあるという現状です。しかし、ICT 化が進み、日々の授業は画期的に変貌しております。この情報機器を使い、各校の様々な活動の交流がオンラインで可能となっています。統合ありきではない各校の知恵と工夫があります。

そして今、「自ら学ぶ児童生徒の育成」を標榜し、学校生活全体の見直しを進めています。例えば、固定化された学級担任制の見直し、過剰な授業時間の見直し、子どもたちの発想や探究心を大事にした授業改善等、教師主導になりがちな学校生活全体にメスを入れる取り組みが全小中学校で試行されています。少子化は避けて通れない現実です。そんな中、単に人集めをする統合という手段だけでいいのかという問題意識が、昭和以来何ら変わる事のない学校現場を変えていこうという動きになりました。教育という言葉は、教え、育てると書きます。誰かと問えば、教師です。昭和以来、主語は教師の学校でした。主語が子どもの学校を目指さなければ、これからの教育は滅びます。少子化を嘆く前に、教育の質をなんとかして高めていく努力をしなければと思うこの頃です。

# 結成 50 周年を祝して

## 文化と人の力が息づくまちから — 横手市退職校長会結成 50 周年への祝辞

秋田県退職校長会 会長 伊藤 栄二

このたび、横手市退職校長会がめでたく結成 50 周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。半世紀という長い歳月にわたり、会の歩みを支え、築いてこられた皆様のご尽力に、深い敬意と感謝の念を抱かずにはられません。

横手市は、第 1 回芥川賞を受賞された石川達三氏や、「釣りキチ三平」の作者である矢口高雄氏など、多くの優れた文化人を輩出してきた土地です。また、作家・石坂洋次郎氏もこの地で長年教壇に立たれ、横手の教育に寄与されました。近年では、「よこてわくわく科学工房」の皆様が、子どもたちに科学の魅力を伝える活動に取り組み、秋田大学横手分校では「教師ミニミニ体験」を通して、未来の教育者を育む取り組みが行われております。さらに、シンガーソングライターの高橋優さんやタレントの壇蜜さんといった個性豊かな人材もこの地から羽ばたいており、まさに横手は文化と人の力が息づくまちであると感じます。

こうした豊かな文化の薫りに満ちた横手の地において、貴会は、高度経済成長という激動の時代に、「横手市平鹿郡退職校長会」として産声を上げられました。その後も、「ゆとり教育」から今日に至るまで、教育を取り巻く環境がめまぐるしく変化中、歴代の会員の皆様は常に教育の本質を見つめ、現場を導いてこられました。退職後もなお、地域の子供たちや現職の先生方を温かく見守り、支え続けてこられた皆様のお姿には、深い敬意と感動を覚えます。

どんなに時代が移り変わろうとも、先輩校長先生方が築いてこられた絆は、今もなお脈々と後輩の皆様へ受け継がれています。その絆こそが、横手市退職校長会という組織を支える確かな礎であり、皆様の真摯な活動を通じて、今も力強く息づいているのだと、改めて感じております。

会報「旭交」第 12 号に掲載された佐々木会長のお言葉——「我々の元気な姿や活動が現職の校長先生たちの心に響けば、本会への積極的な入会につながっていくはず」——を拝読し、その真摯なお気持ちに強く胸を打たれました。まさに、先輩方の情熱と行動こそが、次代へと続く希望の光であり、その想いが未来を照らす力となるのだと、深く共感しております。

結びに、貴会の今後ますますのご発展と、地域および教育界へのさらなるご貢献をお祈り申し上げますとともに、会員の皆様お一人おひとりのご健勝とご多幸を、心よりお祈り申し上げます。このたびは、誠にありがとうございます。

## 発足 50 周年をお祝いして

横手市小中学校校長会 会長 畑 朋幸

横手市退職校長会発足 50 周年、誠にありがとうございます。また日頃より現職校長会の活動へのご協力、地域の教育の振興にご尽力いただいていることに感謝申し上げます。

昭和 50 年の発足当時の状況を知るために何か手がかりはないかといろいろ探してみたところ、南中の書庫から当時の「職員録」を見つけました。そこに掲載されていた学校数、児童生徒数と、横手市のホームページで公開されている令和 7 年度の学校数、児童生徒数を比較してみました。

＜昭和 50 年（横手市平鹿郡）と令和 7 年の横手市の小中学校の比較＞ ※学校数等には分校含む。県立は含まず。

|         | 小学校数 | 児童数（小） | 中学校数 | 生徒数（中） | 学校数計 | 児童生徒計  |
|---------|------|--------|------|--------|------|--------|
| 昭和 50 年 | 47   | 10,188 | 14   | 6,111  | 61   | 16,299 |
| 令和 7 年  | 14   | 3,061  | 6    | 1,759  | 20   | 4,820  |

学校数がこれだけ減っているわけですから、当然校長の人数も減っています。児童生徒数の減少は今後も続きそうで、そうした時代に合った学校経営をしていくことが我々の大きな課題になっています。

今年度横手市校長会では「創造する校長会を目指して～『継承』と『発展』～」をテーマに、「関係機関と連携し、校長会の機能を一層充実させること」「校長としての力量の向上を目指すこと」「互いの連携の強化を図ること」、この 3 点を大きな活動の柱として取り組んでいます。

9 月には退職校長会発足 50 周年を記念して、44 回目となる「教育を語る会」も予定されています。若い頃の私たちを鍛えてくださった方々、部活動を通して深い交流のあった方々など、お世話になったたくさんの方々との再会を楽しみにしております。

最後に、今後も現職校長会へのご支援をお願いするとともに、皆様のご健勝とご活躍をお祈りいたします。

# 結成 50 周年に寄せて

## 絆

元会長 小野寺 幸 雄（平成15年）

就いていた職務の関係で、退職校長会の集まりに初めて参加したのは40代半ばで、会発足10年目の頃となる。錚々たる大先輩たちが皆顔を揃えており緊張極まりなかった。

当時、学校数も多かったが、現職校長と語る会も盛大で、実際学校を訪問し、授業参観や学校経営の研究会がなされていた。小・中学校のみならず高校にも訪れ、雄物川高校や横手高校での会の記憶がある。程なく自分も校長になり、学校経営の発表をさせられ、先輩たちから細々と指導助言を頂いたのだった。思うに、当時は現職と退職者の関係が密で、なされる指導助言も有効に機能する時代だったということだろう。

時代は移り、いつの頃からか、職場においても先輩後輩間の指導助言が希薄になり、個々人が糸の切れた凧のような存在になり、孤立感が課題になってきたように思う。更に、昨今はITの時代になり、世代間の隔絶も増しているのではないと思う。

退職後10数年、地域の小学校の運営委員を依頼され、授業を参観させて貰う機会が年々あったが、近年のITを活用した授業には驚くばかりの時代の変化を感じる。正直、自分の経験則では付いて行けない。道徳の授業の意見交換がタブレット片手になされているのである。加えて世の中はAIの登場である。TVで見たが、大学生たちの就活の中で、AIで創られた面接官による面接も行われているのだという。ますます付いて行けない。

旭交会50周年。発足当初からの歩みの様は変化余儀なくされてきたが、唯一持ち続けられるものは、同じ職にあった者同士の仲間意識だろうと思う。組織への所属感を変わりなくしていきたいと思う。世代間の絆の醸成を育みながら。

## 本会を振り返って

元会長 高 橋 俊 一（平成21年）

本会の50周年記念を心からお祝い申し上げます。先輩会長さんから頂いた歴史の一部の記録の中に、結成が昭和43年、県退職校長会加入が昭和51年とありました。

昭和45年に県退職校長会が全国連合退職校長会に加入していますので、つまり全連退の一組織になって50年となるようです。

昭和40年代になって県内各地区で組織が立ち上げられ、多くの地区が結成と同時に県組織に加入したようですが、本会是他地区に比べ少し遅かったようです。

本会の特色は、総会時における「研修会」や現役校長会との「教育を語る会」ではないでしょうか。特に、この時の講演・講話は現場を離れて久しくなった私にとっては、楽しみであり大きな刺激剤でもあります。

地域の子供たちや住民に自分の専門性を生かした活動の発表、趣味が高じての素晴らしい作品の発表、色々な目標のもとに全国を旅した話などは、退職後の生き方を教えてくれるものであります。また、地域で活躍している方々の講演などは、その活躍の世界が多彩で新鮮な感動を与えてくれています。

今後とも会員相互の交流や研修の場を通して、教育現場の求めに応じて支援していくことに、本会の意義があるのではないのでしょうか。



## 歩みを振り返る

～旭交会総会における講話を通して～

2013(平成25)年 根岸 均氏(秋田大学横手分校長)  
「『教育立県あきた』をめざして」  
2014(令和26)年 柴田康裕師(洞雲寺住職)  
「心安らかに生くー仏教における智慧ー」  
2015(平成27)年 永沢敏昭氏(横手星の会会員)  
「我々はどこから来たのか？我々は何ものか？」  
2016(平成28)年 小泉秀樹氏(元高校教員)  
「歩く旅」 ※日本百名山完登、旧東海道完歩など  
2017(平成29)年 狩野健一氏(本会会員)  
「今、自分ができること」  
2018(平成30)年 佐藤克男氏(本会会員)  
「共助組織保呂羽地区自治会の取り組みについて」

2019(令和元年) 佐々木 仁氏(本会会員)  
「花と緑で彩るまちづくり」  
2020(令和2)年～2022(令和4)年  
※コロナ禍のため中止  
2023(令和5)年 高橋 務氏(元埋蔵文化財センター所長)  
「大正期『金沢古墳』の調査と保存の取り組み」  
2024(令和6)年 阿部 円氏((株)「壺」代表取締役)  
「何もなかった秋田が 何でもできる秋田になるまで」  
2025(令和7)年 佐々木 均氏(秋田大学横手分校長)  
「秋田大学横手分校講座『横手の野鳥を訪ねて』の取り組み」  
※紙幅の都合で直近10年余りの扱いになりましたことご容赦ください。

### 卒寿で改めて想う

遠山 勇 作（平成8年）

小生の教員人生を振り返ると、これといって特筆すべきこともない、教科書をただ教えてきた一介の中学校社会科教師であったと、今更ながら赤面の至りです。

一例を挙げれば、地理では教科書の古い統計をそのまま扱い、歴史では後に大きな社会問題になる強制労働を記述以上に踏み込むこともなく、公民では依然として昔ながらの考えが残る家族のあり方を、通読程度に軽く扱ってきたことなどです。

また、授業では時に脱線することもあったのに、たわいない話だけでなく、社会人として身につけてほしいような話や、人生訓などを話してやれなかったことが悔やまれてなりません。

最後に、このような心境を綴った一首をご笑読願えればと思います。

「教え子に 向ける顔なし みじめさに  
あの日あの時 悔いのみ浮かぶ」

### アバ、見ていて下さいよ

高橋 節 子（平成17年）

私は任用5年目の人事異動で、「国語を2学級ほどもたせてもらえるなら」と告げ、希望どおり特学担任として転勤した。当時は「特学」と言い、その流行は「りんご箱作り」だった。

その時の学級目標は、「ありがとう・できたぞ・またね」の三語。国語の連絡係りが毎日教室にやってきて、ウチの生徒たちとも話すようになった。

2年のPTAの帰りがけに、H男の母さんが、私の傍にきた。「先生の連絡帳を毎日読むのは、H男のアバとしては楽しみ。んだども先生は、本当は国語なのだんすどな。H男はオジッコだから、先生の余った時間で教えてもらえば充分だんす。」驚いた。

今年、そのアバの名前をおくやみ欄で見つけた。……………。

今、私は、横手支援学校にも読み聞かせに月1回伺っている。先生方の支援は、厚く、熱い。アバ、見ていて下さいよ。この子どもたちの声が、大人の余った力に届く世の中になっていく今を。

### 地域に染まりて(2)

佐藤 重 悦（平成23年）

現役の時は7校に勤務し、すべて自宅から通った。しかし地域との関わりは薄く、通り一遍であったような気がする。

恩返しという訳ではないが退職後、地域の環境や保全活動を行う活動組織が立ち上がり、それに参加している。「多面的機能」「農地と水」等とも呼ばれている国事業の有料ボランティアである。水路等の草刈りがメインで昨年度は32回行った。花壇作りや農道の補修など多岐にわたる。私は作業もするが、段取りを付けたり案内を出したりしている。

退職後始めたものにグラウンド・ゴルフがある。会員はほとんどが私より年上で、腕は上がらないが先になってやっている。練習日は火曜と土曜。趣味の囲碁サークルは月曜と木曜。それらに年十数回の大会がある。他に150坪程の畑作り、30品目以上の野菜を作って楽しんでいる。

### 一冊の本との出会い

小田島 容 子（平成24年）

最近、ぶらっと本屋に立ち寄り、目に入った本を何冊か手にしていた中に「石坂洋次郎傑作短編集」という本があった。

私は思わず「えっ」と声を出してしまった。今、読もうと思ってどこを搜しても石坂の本を見つけないことができないでいたのに、ほんとうに喜びの出会いだった。もちろん購入し、ひとつひとつの短編を味わいながら読んだ。若い時も読んだことがあるが、今読んでみても新鮮であることが不思議だ。

短い期間ではあるが、石坂はここ横手に在住していたこともあり、今でもゆかりの場所が残っていることや、この町が作品との関係も大いにあることが、作家石坂洋次郎も、その数々の作品も私にとって身近になっていた要因なのだろう。

山々に囲まれているこの横手盆地の風景を、どんな目でどんな心でみていらしたのだろうと想像してみるだけで、私は楽しくなる。

よろしくお願いします

石井 信 恵（令和7年）

4月から、今年度増設された東かがやき教室でお世話になっています。中学生と過ごすことが多く、「漢文の読み方はどうだったかな」「現在完了って何だっけ」と、中学校の学習内容を、頭をフル回転させて思い出しているところです。

立場や生活環境が変わったことで、見える景色もこれまでとは少し違っているように感じています。退職者一年生として、新しいスタートに立った思いで、これからの時間をどう使ったらよいのか、自分なりに周囲のために何かお役に立ったりご恩返しをしたりできることがあるのか、考えているところです。

ますますご健壯で日々を充実したものにされている先輩の皆様から、たくさんのことを学ばせていただきたいと思います。

どうかよろしくお願いいたします。

今できることを

佐藤 輝 子（令和7年）

ある先輩教諭に、「退職すると、様々なことから解放されて、ゆっくりするよ。」と言われていたのですが、この感覚をもてずに2ヶ月が過ぎました。どの程度感じるかは個々に違いがあると思いますし、退職後の生活によっても違いがあることでしょう。教職を離れたことによりはっきりと分かったことは、「自分は自分でしかない。自分の性分は変えようがない。」ということです。今までと同じように時間を活用しようと、何かをしなければと右往左往する自分がいて、苦笑してしまいます。

今後の生活で心がけたいことは、まずは健康であること、やりたいことには躊躇せずに取り掛かってみることです。今まで一步踏み出せずにいたことにも、前向きに取り組んでみたいと思います。まだまだ楽しいことやできそうなこと、そして新たな発見がありそうです。自分なりの生き方を、楽しんで模索していこうと思います。

気持ちを新たにスタート

木村 篤 子（令和7年）

今年3月をもちまして退職をし、38年間の教員生活を終えることができました。多くの方々の教えや支えがあったからこそ、職責を全うすることができたのだと改めて感じています。深く感謝申し上げます。

退職後の現在は、横手市の教育支援センターで子どもたちの支援に当たっています。これまでの学校現場で感じていた責任感からは解放されつつも、新たな職務に戸惑いを感じながら、それでも気持ちを新たに4月からの生活がスタートしています。

これまでの数々の支援に少しでも恩返しができるように、日々試行錯誤しながら、子どもたちの笑顔がたくさん見られるように努めていきたいと思っています。



再びの学びの機会に

山本 伸 洋（令和7年）

「原点に戻って、教員生活を締めくくりたい。」

役職定年後の自分の在り方をあれこれ考えた末に、もう少し教員生活を続けようと思い、校長会送別会の壇上で冒頭のような挨拶をさせていただきました。

そして現在、平鹿中学校で教諭としての教員生活を送っています。管理職としての経験が多少なりとも生きていると感じる一方で、管理職時代には見えなかったものがあつたことも実感する毎日です。

この度、本会のお仲間に入れていただき、私が原点にいた頃の先輩諸氏の様々な金言やご実践から再び学ばせていただけるものと、期待と緊張が入り交じった思いです。

会員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

## 副担任制に取り組んでいます

横手市立大雄小学校 校長 大石 照彦

令和7年度は、横手市内のほとんどの小・中学校で「チーム担任制」に取り組んでいます。昨今は学級経営上、学級担任一人では対応が難しい子どもや保護者事案が増加している傾向にあります。そこで、複数の教員が当事者意識をもって対応していくための仕組がこの取組です。その中でも十文字中学校は他校に先駆けて令和6年度から、1週間ごとに学級担任をローテーションする取組を行っています。各校が実態に合わせて工夫して取り組んでいますので、やり方も呼称も少しずつ違ってきます。

本校では、昨年度から1学級に担任と副担任を置く仕組をとっていますので、「副担任制」と呼んでいます。例えば、5年生の学級担任は6年生の副担任を、6年生の学級担任は5年生の副担任を兼ね、合同朝の会や合同給食に取り組みました。また、特別支援学級の担任は、所属児童の交流学級の副担任を務め、教務主任には総括学級担任（全学級の副担任的位置付け）を務めてもらっています。

この仕組を導入した結果、教員の意識と行動が変わりました。右の資料は、教員による学校評価の記述欄に書かれていたことですが、それを全職員で共有できたことが、その後の学校経営の大きな推進力になりました。

児童には、年2回アンケートで「たくさんの先生方に見てもらって、よかったと思うことはありますか」と尋ねたところ、3月には75%の児童が「ある」と回答していました。

実は、昨年度途中に、ある学級担任が精神的に折れそうになりました。そこで、総括学級担任、副担任を中心にその学級への関わりを厚くし、学級担任をサポートしたり、直接、児童の学習指導や生徒指導を行ったりしたところ、落ち着きを取り戻すことができました。学級崩壊に向かいそうな危機的状況に副担任制の機能が有効に働いたことは、間違いなく導入の効果と捉えています。ただ、前述の副担任の業務量と精神的な負担は間違いなく増えていました。このような場合、管理職は如何にあるべきかを考えさせられました。

今年度は、副担任が国語や算数・社会などの教科を担当したり、2学年合同の活動を増やしたりして児童との関わりを強くしています。教師・児童の双方にとってより安心感・有効感のある「副担任制」にしたいと思い、日々試行錯誤しています。

- ・副担任制のおかげで「大雄小の子どもを大雄小職員全員で見る」を意識できているように思う。
- ・副担任制が機能している。今後も学団の連携を図りながら児童理解に努め、子どもの実態に応じた指導を行っていきたい。
- ・副担任制により学団がチームとして機能し、学習指導や生徒指導において効果が見られる。今後どのような場面で学団活動ができるのか探っていきたい。
- ・よい意味で学校が変わった。子どもたちの表情が生き生きとしている。笑顔も増えた。
- ・PTAなどの機会に、道徳の各学団の重点内容項目になっている「親切・思いやり」や「生命の尊さ」で交換授業を行ってもよいかも。（副担任制を生かして）

## 学年チーム担任制に取り組んでみて

横手市立十文字中学校 校長 佐藤 健司

十文字中学校は令和6年度より学年チーム担任制に取り組んでおります。そのきっかけは、ちょうど十文字小の統合とコロナによる休校で全てが止まった時、子どもたちが新しい関係性に適応できず、中学校になって不登校が多く出現してしまいました。そして先生方も、仕方がないという理由で半ばあきらめていました。学年で不登校が最大2割を超えたあたりで教育長にご相談したところ、チーム担任制に取り組んでみないかというご提案をいただきました。不安だらけでしたが、プロジェクトチームを立ち上げて準備し、まずやってみようという取り組みだのが始まりです。

チーム担任制とは4クラスを5人で1週間ごとに担任がローテーションする仕組みです。それによって多くの異なる視点によって、塞ぎ込みがちな生徒を早期に発見して支援したり、多様な相談チャンネルによって自己肯定感を上げたりするというねらいがありました。

成果としてあげられる事は、一つ目は生徒が先生に話しかけやすくなったという声がありました。チーム担任制は教師側からどんどん生徒に声をかけ、教育相談も生徒が先生を選んで相談ができるようにしました。その延長線上には、わからないことがすぐ先生に聞けるようになったとの声もあり、学習状況調査も予想外の結果が出ています。来年もチーム担任制を続けてほしいという生徒の声が8割以上もありました。

二つ目は、自分たちの学級は自分たちでつくるという自治意識が高まりました。最初は先生方が足並みを揃えて指導していくために、たくさんの打ち合わせをする時間が必要でした。どんなに打ち合わせをしても、生徒も保護者も先生によって指導が違うというクレームがあがってきます。そこで、担任によって違いが生じた時、先生方は「じゃあ、あなたたちはどうする？」と問いを投げかけることにしました。そうすることで、学級のリーダーを中心に話合いの時間を求めて、学級のルールを責任をもって決められるようになりました。これが自分たちで自治活動をしていくという、大きな大きな成長につながったと思っています。

チーム担任制を進めるにあたって、1番のキーパーソンは学年主任です。不協和音や不具合があるのが当たり前です。試行錯誤しながら修正改善を繰り返し、よりよい方向へ導く熱量が必要なのが、学年主任であることがはっきりしてきました。したがって、チーム担任制をとることで、校内人事では思い切った配置にすることができ、学校経営の活性化に大きく貢献することもできるとも感じています。

最後に先生方のアンケート結果は、9割以上が来年度も続けたいという結果となりました。今や横手市でほとんどの小・中学校が導入を始めています。十文字中のチャレンジが横手の教育に貢献し、様々な学校課題を解消できることを願ってやみません。

## 会員ギャラリー



オダマキ

慎ましく下向きに咲く気性に学ぶことが多い。



エビネ

「地エビネ」は本当に地味だが、春先には力強く芽が出るので好きな花の一つ。



タイツリソウ

見ているとそんな風に見えてくるのがおもしろい。

花を愛でる原動力、それは「小さな好奇心」と「大袈裟な感動」で、いつも見つめています。

高見祥一（平成20年）

## 短歌

利尻岳より列島縦断屋久島の  
宮之浦岳までの山旅

手に触れし岩の感触よみがへる  
槍より穂高の峰々にして

白馬より正面に見る剣岳の  
荒き岩肌感触深く

石鎚の急登のぼり瀬戸内の  
平明の海の青さにひたる

独立峰開聞岳の山容の  
急登のぼり薩摩灘見つ

高校時代、兄の机上にある歌誌「アララギ」を目にするようになり、歌作に興味を持つようになりました。また、高校時代から山登りに関心があり、時折、登山に挑戦していました。退職間際から本格的になりました。必然的に山岳詠が多くなっていきました。

森田 溥（平成5年）

## 俳句

一年前、テレビ番組プレバトを観て、自分にもできるのではないかと始めた俳句です。この度は子どもたちとの関わりから出来た四句を送ります。旭交五十周年記念号にマッチしているといのですが。

（四句とも秋田魁新報読者文芸欄掲載作品）

若松朋也（平成30年）



歓声の去りしコートや春の夕  
汗拭いバッシュの紐を強く締め  
秋の雲見上げ水筒ニリットル  
コスモスや補助輪外し強くこぐ

令和7年度は6名の新会員をお迎えし、4月1日現在で、会員218名（うち名誉会員53名）で本会がスタートしています。本年度の役員、新会員、米寿を迎えられる会員をご紹介します。

【役 員】

- 会 長 佐々木孝雄
- 副 会 長 永 沢 弘、鈴 木 康、佐々木 均
- 監 事 七 尾 博、高橋 玲子
- 事務局員 新田 義孝（事務局長）、島 田 誠（会計担当）  
佐藤 克己、木 村 司、鎌 田 誠

【新会員（敬称略）】

- ※（ ）内は役職定年時勤務校
- 石井 信恵（朝倉小学校）
  - 小坂 靖尚（浅舞小学校）
  - 佐藤 輝子（吉田小学校）
  - 木村 篤子（十文字小学校）
  - 山本 伸洋（増田中学校）
  - 西野 美佳（大仙市立横堀小学校）

【米寿を迎えられる会員（敬称略）】

-  小 坂 久、佐々木 久、塩屋 輝夫、小野寺 忠  
渡邊 幸治 以上5名

総会では、米寿を迎えられた佐々木久先生に佐々木孝雄会長から壇上で賀詞が手渡され、会場に来られなかった皆さんには後日、会長がご自宅にお届けに上がりました。その後、議長：石川真須夫先生の下、円滑に報告・協議が進められ、最後に会則の一部改正について佐々木会長から説明があり、本会で承認されました。

引き続き、秋田大学客員教授・横手分校長の佐々木均先生から「秋田大学横手分校講座『横手の野鳥を訪ねて』の取り組み」と題した講話をいただきました。野鳥観察がライフワークとなったきっかけから、現在に至るまでの熱い情熱に感銘を受けました。また、小野寺幸雄先生から「春に田んぼにいる野鳥は何を食べているのか？」という質問に対する回答で、落穂ではないことを初めて知ることができました。

その後、開催した懇親会で、ある会員の「会に参加するまでは少しおっくうだったが、懐かしい方々と昔話や現在の様子等についてお話できたことで元気が出た。楽しかった。」という言葉が、本当にありがたく感じられました。

9月19日(金)には、現職校長会と合同で「教育を語る会」を開催いたします。研修会では、旭交会結成50周年記念講演として、マジシャン・タレントのブラボー中谷氏によるマジックとトークが計画されています。「日本一のいかさま手品師」と自称していますが、ブラボー中谷氏が歩んできた人生は、高い目標の実現を目指す強い信念から生まれた笑い、涙と感動にあふれる「本物」であり、是非、多くの方々に見て、聞いて、笑っていただきたいと思っております。

横手市退職校長会は、多くの方々の協力で成り立っています。年3回、会員の皆さんのご自宅に、様々な資料等を届けてくださっている地区委員や総会資料等配付担当者の皆さん。会報「旭交」の編集を行ってくださっている会報編集委員や快く執筆依頼を受けてくださる会員の皆さんなど、多くの方々に心から感謝しております。そんな皆さんの労をねぎらう意味でも、是非、多くの会員の皆さんが「総会」や「教育を語る会」に参加し、親交を深めていただきたいと願っているところです。どうか、よろしくお願いいたします。

本会を代表して酒井 浩氏が次の大会で発表します

東北地区退職校長会協議会 10月9日(木) 山形国際ホテル  
秋田県退職校長会秋季研修大会 10月18日(土) 協働大町ビル

～「子どもたちにもっと自然体験を」と願いながら8年～ 酒 井 浩

現職時代から子どもたちの自然離れを感じていた。そして、これは、子どもたちの成長に悪い影響を与えるのではないかと危惧していた。そこで、現職時代から休日にボランティアで自然観察会を行うことにした。退職してからは、他の仕事は一切せずに地域の親子を中心に自然観察会や自然体験活動などを里山のフィールドで進めることにした。当初は、私が無名なこと、さらにコロナ禍も加わり、思うように参加者が集まらなかった。それでも継続して行うことにより今では、月1回実施する自然体験塾には多い時で親子が50名を超えるようになった。活動日数も年間およそ100日を数えるようになっている。

釣りキチ三平の里自然体験塾



編 集 後 記

▶ 結成50周年という節目の年を迎え、大きなことはできなくとも気持ちのこもった活動をしていこうと役員会で話し合いました。

▶ 今号が会員の皆様の期待に応えられる内容になっているか甚だ自信はありませんが、県退職校長会会長様や横手市教育長様はじめ、多くの会員の皆様からご寄稿いただきました。

▶ 会報編集委員一同、衷心より感謝を申し上げます。